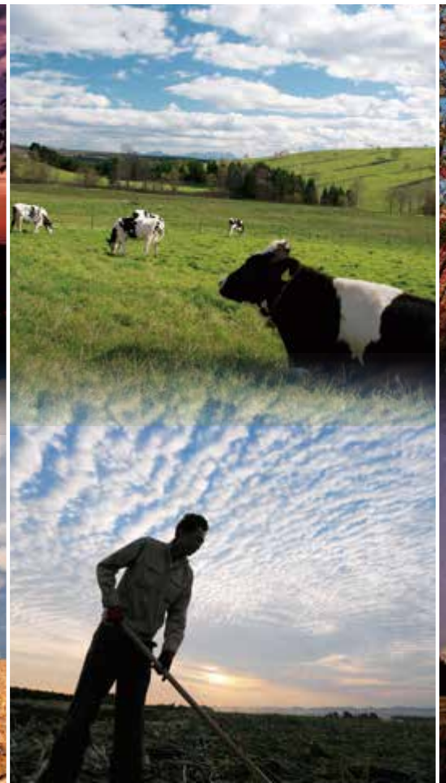
キラめくまち くんねっぷ

訓子府町開基120年記念町勢要覧

Kunneppu



HOKKAIDO くんねっぷ Kunneppu

120th Anniversary
of Kunneppu

キラめくまち くんねっぷ
訓子府町開基120年記念町勢要覧

企画・編集：訓子府町
制作・印刷：㈱須田製版
文　　章：師田 真由美
写　　真：森下 暢亮（OFFICE NMD）・訓子府町

発行：訓子府町
〒099-1498 北海道常呂郡訓子府町東町398番地
TEL 0157-47-2111 FAX 0157-47-2600
ホームページ　http://www.town.kunneppu.hokkaido.jp/
Eメール　kun@town.kunneppu.hokkaido.jp

〈訓子府町イメージキャラクター〉

たまねっぷ

めろねっぷ

地域がキラめく
ひとがキラめく
明日がキラめく

北海道東北部に位置する訓子府町。
大雪山系の山々に囲まれた盆地で、
オホーツク海へと注ぐ常呂川が流れます。
いまから120年前、
原生林が生い茂る未開の大地に
先人が分け入り、鍬を下ろし、
開拓が始まりました。
豊かな森林は産業を生み出し、
肥沃な大地は多くの恵みをもたらし、
訓子府町の礎を築きました。
そして、豊かで住みよい町、
誰もが住み続けられる町をめざし、
たゆまぬ努力が重ねられてきました。
訓子府町が開基120年を迎えたいま、
よりよい未来を創るため、歴史を振り返り、
現在を知り、訓子府の魅力を再確認しましょう。

CONTENTS
もくじ

キラめくまち
キラめく大地 03
キラめく歴史 11
［訓子府物語］ 13
キラめく人と地域 21
訓子府エリアマップ 25
メイド・インくんねっぷ 27
タマネギ
スノーマーチ
くんねっぷメロン
くんねっぷの酪農
訓子府の後継者たち 33
［特産品］訓子府ブランド 37
訓子府町
開基120年記念事業 39
訓子府のまちづくり 41
福祉
教育
生活環境
防災・安全
姉妹町交流
行財政

キラめくまち
Kunneppu

キラめく大地

景 祭 花 農

訓子府町は、北見市の南西に位置しており、オホーツク海に注ぐ常呂川が町の中央を西から東へ流れています。常呂川の流れに沿うようにして肥沃な大地が広がり、盆地特有の寒暖差のある気候も相まって多様な農業形態が発展しました。畑作・酪農が盛んで栽培品目は多岐にわたり、訓子府町は北海道農業の縮図といわれています。タマネギの生産量は全国屈指となり、町内の北見農業試験場ではジャガイモの新品種スノーマーチを開発、訓子府メロンも特産品として知られるようになりました。たくさんの農産物を生み出す訓子府の大地は、人々の暮らしを穏やかで豊かなものにしてくれます。

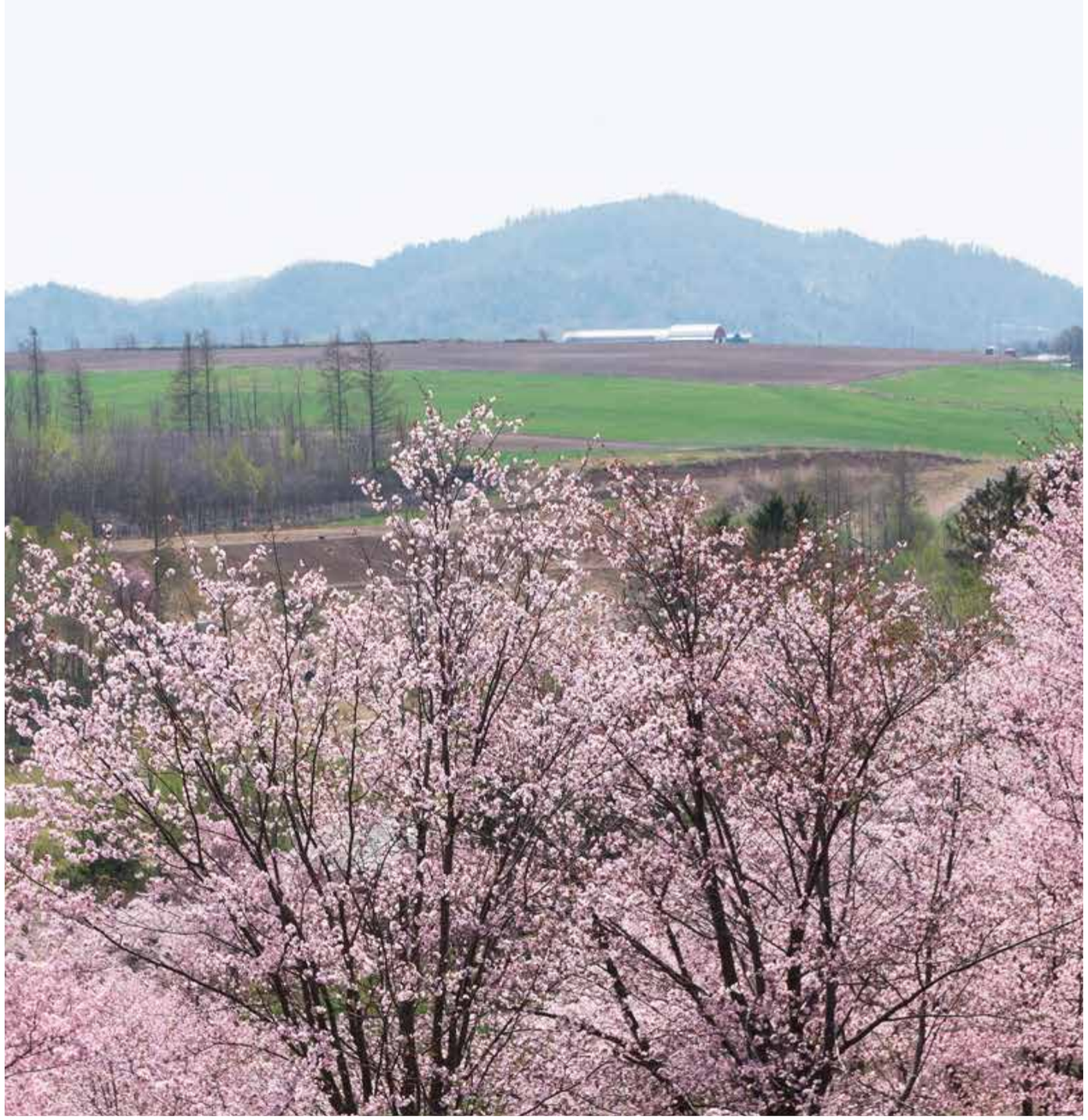
見渡す全てが大地の恵み

雄大な自然に恵まれた訓子府町では
さまざまな農産物をつくり、人々の営みを支えています。
先人たちが切り拓いてきたこの大地は、
訓子府町の宝であり、暮らしそのものなのです。

訓子府町の周囲は山に囲まれた盆地になっており、最暖日の平均は20～21度、最寒日の平均は零下8～9度と寒暖差が大きい盆地特有の内陸性気候です。年間降水量は比較的少なく、日照率が高い地域で農業に適しているといえます。タマネギ・畑作三品（ジャガイモ・小麦・ビート）・酪農を基本に、水稲、豆類、加工用スイートコーン、メロンなど栽培品目は多岐にわたります。訓子府町も農業従事者の高齢化と後継者不足の問題を抱えていますが、農業者個々の経営努力などもあり、農業生産額は年々上昇しています。

四季の美しさが身近にある幸せ

美しく雄大な景色が広がる訓子府町。
オホーツク海へ注ぐ常呂川が町の中央を流れ、
豊かな森林は、恵みの大地をはぐくみ、
季節の花々は町民の暮らしに彩りを添えています。



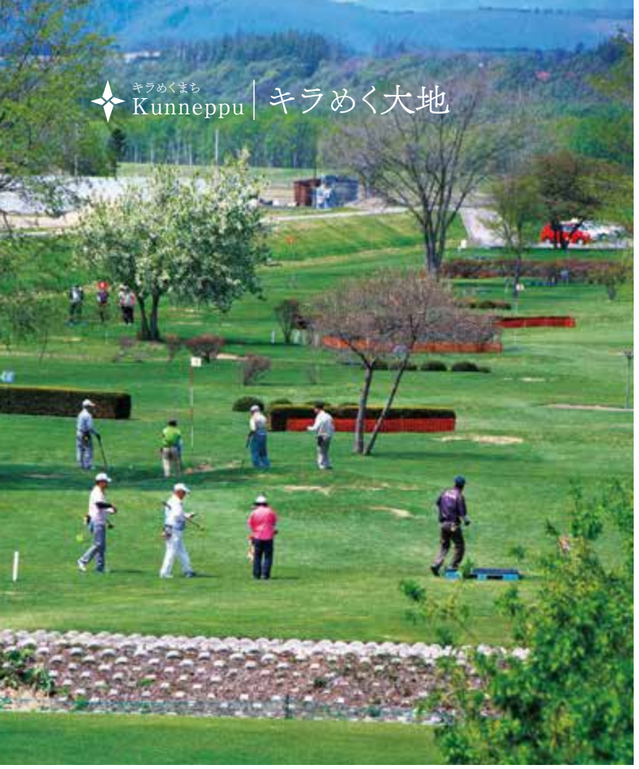
訓子府町の面積は190.95平方キロメートルあります。半分は森林で覆われており、そのうち36.9%が人工林でカラマツが多く植えられています。森林面積に占める道有林は全体の65.1%、私有林が25.9%、町有林が9.0%となっています。訓子府町では、この恵まれた自然をはぐくみ環境緑化推進にも積極的に取り組んでいます。

昭和52年に環境緑化推進のまちづくりの一環として行った町民アンケートをもとに、庭先に気軽に植えられる「エゾムラサキツツジ」と古くからある象徴的な「オンコ」を、町花・町木として訓子府町開基80周年記念事業に合わせて町民憲章推進協議会で決められました。

笑顔があふれる心豊かな日々の暮らし

四季に彩られ、季節の実りに恵まれ、
のびのびと穏やかに暮らすことができる訓子府町。
子育て支援など福祉の充実にも積極的に取り組んでおり、
毎日を快適に過ごせる豊かな環境があります。

訓子府町には、常呂川河川敷に6コース54ホールある公認パークゴルフ場、温泉保養センター、春には約４００本の桜と丘一面に芝桜が花開くレクリエーション公園など、恵まれた自然を生かした町民の憩いの場があります。また、季節ごとに町民が交流するイベントがあり、夏には市街地や常呂川河川敷で「ふるさとまつり」が2日間にわたって開催され、前夜祭は太鼓の演奏や訓子府音頭、行灯パレードや花火大会、本祭は歌謡ショーや特産品の販売、アトラクションなどが行われ夏を盛上げます。冬は町公民館前特設会場で「さむさむまつり」が行われ、雪像や雪の滑り台、キャラクターショー、綱引きなどがあり、子どもたちの歓声でにぎわいます。



キラめく道史 想夢 歴史

訓子府町の名は「クンネプ」というアイヌ語に由来しており、「黒いところ、やち川にして水黒し」の意味があります。ここは湿地で農業に適しているとは言い難い土地だったのです。

しかし、高知県から入植した北光社移民団は、この北の大地に希望の光を求めて、開拓の一歩を踏み出しました。

それから120年。先人たちが切り拓いた大地に根を下し、たくさんの命をはぐくみ、人々の希望をつなぎながら発展していきました。

訓子府の歴史を知ることで、町の魅力を再確認しましょう。

Roots ✧ 訓子府物語

記録の中に訓子府が登場するのは、江戸時代の1858(安政5)年のことです。入植前は原始林が生い茂る未開の原野でした。1897(明治30)年、四国の土佐から北光社移民団が入植してきます。先人たちは、厳しい環境のもと、鍬を下ろし開拓を進めていきました。幾多の苦難を乗り越え、開拓から23年の1920(大正9)年、訓子府村として独立。54年後の1951(昭和26)年には、現在の訓子府町となりました。

大昔の人たちの足跡を辿る。

訓子府町には太古の昔、人々の営みがあったことを示す遺跡があります。廃校となった旧緑丘小学校南側の「緑丘B遺跡」から黒曜石の石器などが発掘され、オロムシ沢入口にある「増田遺跡」からはホロカ型彫器などが発掘されました。いずれも旧石器時代の足跡を示す貴重な資料でありますが、出土品から当時の様子は具体的に解明されていないものの、1万年以上も前から人々の暮らしがあったのです。

1858(安政5)年、江戸幕府より蝦夷地の地理調査を任命された松浦武四郎が、「アイヌの道案内により、現在の北見市常呂町、北見市端野町、北見市などを経て訓子府町の日出、大谷付近にたどり着いた」という内容が残されており、これが記録の中に訓子府が登場する最初の記述です。

1882(明治15)年、奈良県十津川村から来た原鉄次郎が、「釧路から馬17頭を引き連れて足寄から利別川を遡り、ケトナイ沢に出た。原野を焼き、鹿の角を集め、常呂川を下って網走に向かった」とされています。

1886(明治19)年、東京から来た杉村某が、狩猟目的に日高地方のアイヌを雇ってクンネップ原野のオロムシ(現在の大谷)に滞在。数年後に帰郷しましたが、同行したアイヌ2世帯はそのまま残り、大谷地区と常呂川沿いに小屋を建てて、鹿、熊、鮭などを獲る狩猟生活を続けました。このアイヌ2世帯が近代最初の定住者といわれています。

平村エレコーク
明治19年～29年、オロムシに住んでいた平村エレコーク

遺跡

増田遺跡
1971(昭和46)年と翌年の2年間調査され約400㎡から細石刃、細石核、磨り石など、約1,700点の石器が出土しました。

緑丘B遺跡
1958(昭和33)年に64㎡の発掘調査が行われ、細石刃829点、彫器18点など約3,400点もの石器が出土しました。

北光社移民団の入植
北の大地に鍬を下ろす。

北光社本部跡地

北海道に開拓使が置かれたのは1869（明治2）年のことでした。その20年後に北見地方の植民地選定調査が始まり、1891（明治24）年クンネップ原野が植民地域に選定され区画調査を開始。原生林が生い茂る中、雨露は天幕でしのぎ、熊に怯え、ブヨや蚊に悩まされ、測量隊は次々と体調を崩していきました。そんな未踏の原野に希望を抱いて開拓のために入植したのが、坂本直寛らの北光社です。

北光社は、北海道（主に北見地方）の開拓を目的に、高知県内で自由民権運動を推進した土佐自由党のメンバーである片岡健吉、西原清東、澤本楠弥、傍士定治、大脇順若、坂本直寛らで組織した合資会社。1896（明治29）年8月、坂本直寛一行は視察したクンネップ原野に可能性を見いだして開拓を決意しました。入植手続を進めながら移住民規則を制定し、開拓移民を募集しました。そして翌年4月、高知県浦戸港から112戸（約650人）、須崎港から50戸（約150人）が高洋丸に乗り込み、北光社移民団は日本海を北上して北海道をめざしたのです。

高洋丸は給水のために小樽港に寄港し、稚内を周ってオホーツク海へ抜けました。船旅の途中、麻疹が伝播して多数亡くなり、宗谷岬を周ってからは流氷やクジラに航路を阻まれ、何度か引き返して5月上旬ようやく網走港に入港することができました。1カ月ほどの船旅は、これからの開拓を暗示するかのごとく困難なものでした。

網走到着後、移民団の一行は2日間の休息後、各自重い荷物を背負い、北光社本部のあるクンネップ原野へ歩いて向かいました。見渡す限りの原生林、道無き道をひたすら歩き続け、網走を出発して3日目の夕方、北光社本部に到着。本部といっても簡素な建物で、集会所、トイレ、風呂、厨舎などがある程度でした。

1897（明治30）年5月8日、北光社移民団のうち訓子府のオロムシ地区に入植したのは13戸（45人）で、その後、数戸の入替を経て14戸が訓子府の礎を築くため、長く険しい開拓をしていくことになるのです。それは南国土佐出身の開拓民にとっては想像を絶する自然との戦いの幕開けでもありました。

坂本 直寛

坂本直の実弟で龍馬の甥であり、坂本家5代目当主。1853（嘉永6）年10月5日生まれ。龍馬の宿願であった北海道開拓を引き継ぎ、1895（明治28）年、同志と共に合資会社北光社を設立して一家共々高知県から北海道に移住。その後、牧師となって軍隊や監獄での伝道活動や廃娼運動などに従事する。1911（明治44）年9月、病気のため札幌にて永眠、享年59歳。

長旅の果てに広がる未踏の原野

北光社移民団は、まず大地を覆う笹を刈り、大木を切り倒すことから作業を始めました。生活拠点は6坪ほどのあばら屋で風雪は容赦なく吹き込み、日々の食料にも事欠くほどで、野草や山菜で飢えをしのぎました。開墾が進むに連れて寒冷地でも比較的強い馬鈴しょ、ソバ、キャベツなどを栽培しましたが、入植した翌年の秋、大豪雨に襲われて、ほとんどの作物が濁流に飲み込まれてしまったのです。この大洪水を教訓に、1899（明治32）年クンネップ川と常呂川沿いに上常呂までの排水路を造りました。

1900（明治33）年、訓子府尋常小学校（北見市上常呂）が開校して児童308人が就学、教育にも力が注がれました。また、道路網の進歩も目覚ましく、1906（明治39）年には交通補助機関として、宿泊・人馬継立・郵便などの業務を行う施設・訓子府駅逓が開設。野付牛から常呂川北岸を通る道路工事が行われ、2年後には置戸までの細い借り分け道路が完成しました。これが現在の街の中心を通る「道道北見置戸線」です。

1911（明治44）年に訓子府駅が開業し、翌1912（大正元）年には網走本線がついに開通し、急速な発展を遂げていきました。

一方、坂本直寛は移住後わずか数ヶ月で野付牛（現在の北見市）を去ってしまい、2代目の社長は澤本楠弥となりました。そして1914（大正3）年、北光社は黒田農場へ譲渡され、18年間にも及ぶ北光社の歴史に終止符が打たれたのです。

北光社関係者

高洋丸
長さ61.5m・幅8.8m・トン数727.67トン

※駅逓所（えきていじょ・えきていしょ）は北海道の開拓時代にできた施設（宿場）です。

災害と復興を重ねて 訓子府村の幕が上がる

水田地帯

ビート収穫

馬耕風景

訓子府に薄荷（ハッカ）の苗が移入されたのが1902（明治35）年。需要が高くて高値で取引されたことから耕作農家が急増し、薄荷油精製も盛り上がっていきました。1907（明治40）年には雑貨店が開店し、1年後には植林業、2年後には畜産業と産業が拡大。その数年後には、火力発電所から電気が引かれるようになりました。1919（大正8）年には現在、主要農産物となっているタマネギ栽培が開始されました。

しばらく穀物や薄荷の栽培は隆盛を誇りましたが、第一次世界大戦（1914～1918年）の終結によって輸出品だった穀物は暴落し、工場は相次いで撤退。軍需景気に沸いた地方経済は大きな打撃を受けました。さらに大豪雨や洪水などに見舞われて凶作も続き、住民たちは疲弊していったのです。北海道庁は穀物ブームで荒廃した畑にビートの作付けを奨励し、乳牛飼育農家に対する助成金制度を導入して農業の立て直しを図りました。そして訓子府は稲作へ転換していきます。1921（大正10）年、クンネップ川流域、中ノ沢、翌年に現在の駒里と弥生の流域で造田が行われ、本格的な稲作への取り組みが始まりました。

訓子府は、1915（大正4）年4月野付牛村（現・北見市）から分村して置戸村となり、1920（大正9）年6月、1140戸（6592人）をもって訓子府は置戸村から分村独立を果たしました。初代村長は、野付牛で上席書記の職にあった山崎亮智。7月には村会議員の選挙も行われ、12人の議員が誕生しました。当時、議会で取り上げられた議題は、度重なる水害の復興策、経済恐慌による不況対策、農村振興、教育施設の充実、役場庁舎の建設などでした。

やがて元号は昭和へと変わります。冷害や水害などの災害に悩まされて順風満帆ではありませんでしたが、訓子府の人口は次第に増え、辛苦を越えながら産業は発展していきました。ところが、第二次世界大戦（1939～1945年）に突入すると、日本はもとより訓子府もその様相は一変します。青壮年の男子は次々と徴兵されて主要産業である農業生産は落ち込み、商店や小売業は転廃業に追い込まれ、村民の暮らしは厳しくなっていきました。

豊かな大地を礎にはぐくむまちづくり

終戦の混乱が続く1947（昭和22）年5月3日に新憲法が施行され、衆議員・参議院議員選挙、知事選挙、市町村長選挙などが実施されました。戦後初代村長には農民の支持を得た谷本泰三郎が当選。村議会議員選挙では定員20人のところ新人14人が当選し、新しいまちづくりの第一歩がスタートしました。

敗戦という大きなダメージのもと食糧難は深刻で、暗い世相ではありましたが、次第に青年団や婦人団体の活動が活発になり、希望という光が差し込むようになりました。1949（昭和24）年7月、住民のスポーツ振興と向上をめざして体育連盟が結成され、第1回村民大運動会を開催。娯楽の少ない時代だったこともあり、この大運動会は大変盛況でした。

叶橋工事

道内各地にできた農業協同組合は苦しい経営状況でしたが、訓子府農協においては全村単一農協として発足したため、酸性土壌改良5カ年計画を推進して着実に業績を上げました。この土地改良によって、馬鈴しょ、タマネギ、ビートなどの収穫量は格段に増え、訓子府農業は回復の一途を辿ったのです。ところが村の財政は猛烈なインフレのあおりを受けて困窮を極め、道路や橋の拡張工事は滞りがちでした。

1951（昭和26）年、訓子府は「村」から「町」への昇格に向けて、さまざまな整備に着手しました。最初に手掛けたのは、老朽化して手狭になった役場庁舎など公共施設の整備。さらに小中学校の基礎工事、市街地の側溝や道路の改修、ゴミ焼却炉、街灯の設置など、生活に関わる環境整備も行われました。そして同年11月、訓子府村は「訓子府町」に生まれ変わったのです。

1953（昭和28）年、町内の各区名を整備。変電所の設置も決まり、長年電力不足で悩まされ続けた産業や人々の生活は近代化していきます。翌年には簡易水道が完成し、道立農試北見支場の誘致に成功。このころは凶作が続いて基幹産業である農業は停滞しましたが、農協による連絡協議会の発足によって諸問題の解決に取り組んだことで活気をもたらしました。さらに工業や建設業といった二次産業も活況を呈し、訓子府の発展は加速していったのです。

近代化する街並み

1959（昭和34）年、商工会が設立。その後、隣接する北見市に大型百貨店がオープンし、地元商店街の売り上げは減少しましたが、地域活性化に取り組み、さまざまな地域密着イベントを通して町民との交流を深めています。

時は流れて元号は昭和から平成に変わり、21世紀を迎えました。時代の変化に伴い、行政も産業も大きく変化を遂げています。しかし、北光社が訓子府を開墾したフロンティア精神は今も変わらず受け継がれています。

懐かしい香り「薄荷」

在来式薄荷蒸留器は、木蓋をした蒸留槽で薄荷を蒸して、薄荷油を精製していました。木蓋が平らで蒸留に時間がかかりましたが、後に円錐型の蓋が取り付けられて蒸留時間の短縮につながりました。

くんねっぷ歴史館では、当時訓子府の産業を支えたともいうべき在来式薄荷蒸留器が展示されています。

訓子府の足跡

- 明治29年 ・北光社の初代社長坂本直寛、澤本楠弥、前田駒次らがクンネップ原野を視察
- 開拓の祖大谷清虎が大工を連れ移民小屋を建設
- 明治30年 ・大谷清虎、馬場正吉ら13戸45人が本町オロムシ地区に入地
- 明治33年 ・上常呂に訓子府尋常小学校を開校
- 明治35年 ・ハッカの栽培が始まる
- 明治39年 ・訓子府駅逓開設
- 穂波、実郷で米を試作
- 明治41年 ・訓子府教育所を西24号に開所
- 明治42年 ・妻恋橋（現在の叶橋）完成
- 明治44年 ・訓子府駅開業
- 明治45年 ・訓子府郵便局設置
- 大正2年 ・訓子府巡査駐在所設置
- 大正3年 ・訓子府教育所が訓子府尋常小学校に昇格
- 大正4年 ・野付牛村（現北見市）から置戸村が分村し訓子府は置戸村に所属する
- 北訓教授場を開校
- 大正5年 ・公設の訓子府消防組設置
- 居武士教授場開校
- 大正6年 ・訓子府商工組合設立
- 大正8年 ・タマネギの栽培が始まる
- 大水害で妻恋橋、大谷橋などが流出
- 大正9年 ・置戸村から分村し訓子府村が誕生
- 昭和元年 ・役場庁舎新築
- 昭和5年 ・訓子府市街の大火
- 昭和9年 ・妻恋橋を架け替えて「叶橋」に改称
- 昭和15年 ・訓子府商業組合設立
- 昭和22年 ・村長公選
- 初代村長に谷本泰三郎当選
- 訓子府中学校開校
- 昭和23年 ・北見北斗高等学校訓子府分校開校
- 訓子府村農業協同組合設立
- 昭和26年 ・役場庁舎、公民館建設
- 町制施行（11月1日）町章制定
- 谷本泰三郎が初代町長となる
- 昭和29年 ・道立農試北見支場の本町移転決定
- 昭和34年 ・訓子府町商工会を結成
- 昭和39年 ・ホクレン訓子府種畜改良牧場完成
- 昭和41年 ・開基70年、町制施行15周年式典
- 昭和42年 ・第二代町長に渡邊義夫当選
- 昭和43年 ・消防庁舎建設
- 昭和44年 ・共同利用模範牧場完成
- 昭和45年 ・開町50周年、町制施行20年記念式典
- 町民憲章制定
- 昭和47年 ・北見地区消防組合発足
- 昭和49年 ・中央公園完成
- 訓子府小学校統合校舎完成
- 昭和51年 ・訓子府高等学校が道立に移管

空からみた訓子府市街（昭和41年）

- 昭和52年 ・開基80周年記念式典
- 町花、町木の制定
- 昭和53年 ・スポーツセンター完成
- 昭和54年 ・第三代町長に佐藤忠義当選
- 昭和57年 ・公民館完成
- 昭和59年 ・図書館完成
- 昭和61年 ・開基90年記念式典
- 図書館貸出率日本一
- 農村環境改善センター建設
- 昭和63年 ・茨城県関城町（現 筑西市）と教育姉妹町締結
- 平成元年 ・「ふるさと銀河線」開業
- 屋内ゲートボール場完成
- 平成2年 ・特別養護老人ホーム「くんねっぷ静寿園」開園
- 平成3年 ・第四代町長に深見定雄当選
- 訓子府温泉保養センターオープン
- 平成4年 ・市街地区下水道供用開始
- 平成5年 ・中学校新校舎建設
- 日ノ出地区ふれあいセンター完成
- 平成6年 ・訓子府高等学校新校舎建設
- 銀河公園完成
- 平成7年 ・温水プール「KAPPA」オープン
- 平成8年 ・開基100年記念式典
- 叶橋完成。
- レクリエーション公園完成
- 平成9年 ・葬斎場「清陵苑」完成
- 末広地区農業集落排水供用開始
- 平成11年 ・日出地区農業集落排水供用開始
- 平成12年 ・ポケットパーク完成
- 農業交流センター「くる・ネップ」オープン
- 平成13年 ・高知県東津野村（現 津野町）と姉妹まち締結
- 町制施行50周年記念式典
- 役場庁舎、総合福祉センター「うらら」完成
- 平成14年 ・街並み整備事業全面完成
- 平成16年 ・くんねっぷ歴史館オープン
- 平成18年 ・ふるさと銀河線廃線
- 平成19年 ・第五代町長に菊池一春当選
- 平成22年 ・子育て支援センターオープン
- 平成23年 ・町制施行60周年
- 平成25年 ・児童センターオープン
- 平成28年 ・認定こども園オープン
- 開基120年記念式典

時代を駆け抜けた、第三セクター鉄道

暮らしを灯したふるさと銀河線

ふるさと銀河線は、道東の十勝管内池田町を起点とし、池北峠を越えて、終着駅がある北見市までの合計7市町を縦貫する総距離140㎞の鉄道です。

もともと1911（明治44）年、道央と網走を結ぶ幹線鉄道として開業しましたが、1987（昭和62）年の国鉄分割民営化に伴い、北海道旅客鉄道（JR北海道）に承継されました。1989（平成元）年6月4日に北海道や沿線市町村、民間会社などが出資する第三セクター「北海道ちほく高原鉄道」に転換され、路線名も「ふるさと銀河線」に改称されたのです。

訓子府駅は開業した1911（明治44）年以来、地域の活性化に大きく貢献しました。それは、ふるさと銀河線になっても変わらず町民の暮らしを支え続けてくれたのです。2000（平成12）年には駅舎を改築して、農業交流センター「くる・ネップ」もでき、町内外の人々に親しまれていました。ちなみに、ふるさと銀河線に乗って星空のロマンを感じてもらおうと、一部の駅に星座名がつけられており、訓子府駅は「おとめ座」でした。

しかし、沿線の人口減少や車社会の浸透から、ふるさと銀河線の利用者は減少していきました。2006（平成18）年4月20日限りで廃止され、バス路線に転換。そして北海道の旧国鉄特定地方交通線はすべて消滅しました。

旧訓子府駅には、農業交流センター「くる・ネップ」があり、駅舎はバスターミナルの待合室や飲食店も併設され、コミュニティースペースとして活用されています。ふるさと銀河線は廃止となりましたが、形を変えて地域の暮らしを見守ってくれています。

全国初の教育姉妹町茨城県関城町

1988（昭和63）年、訓子府町は茨城県関城町と全国初の教育姉妹町を締結しました。1974（昭和49）年に農業構造改善事業などを通して関城町との交流が始まり、両町の教育委員会で正式に教育姉妹町の締結へと発展。翌年から両町の小中学生がお互いの町を訪問するなど交流を深めました。2005（平成17）年、関城町の合併により教育姉妹町の交流は終了しましたが、いまも心の絆は残っており、旧関城町（現茨城県筑西市）の旧グリーンスポーツセンター前には、2008（平成20）年に建立された「交流記念の碑」があります。

交流記念の碑

キラめく

暮 継 命 食

人と地域

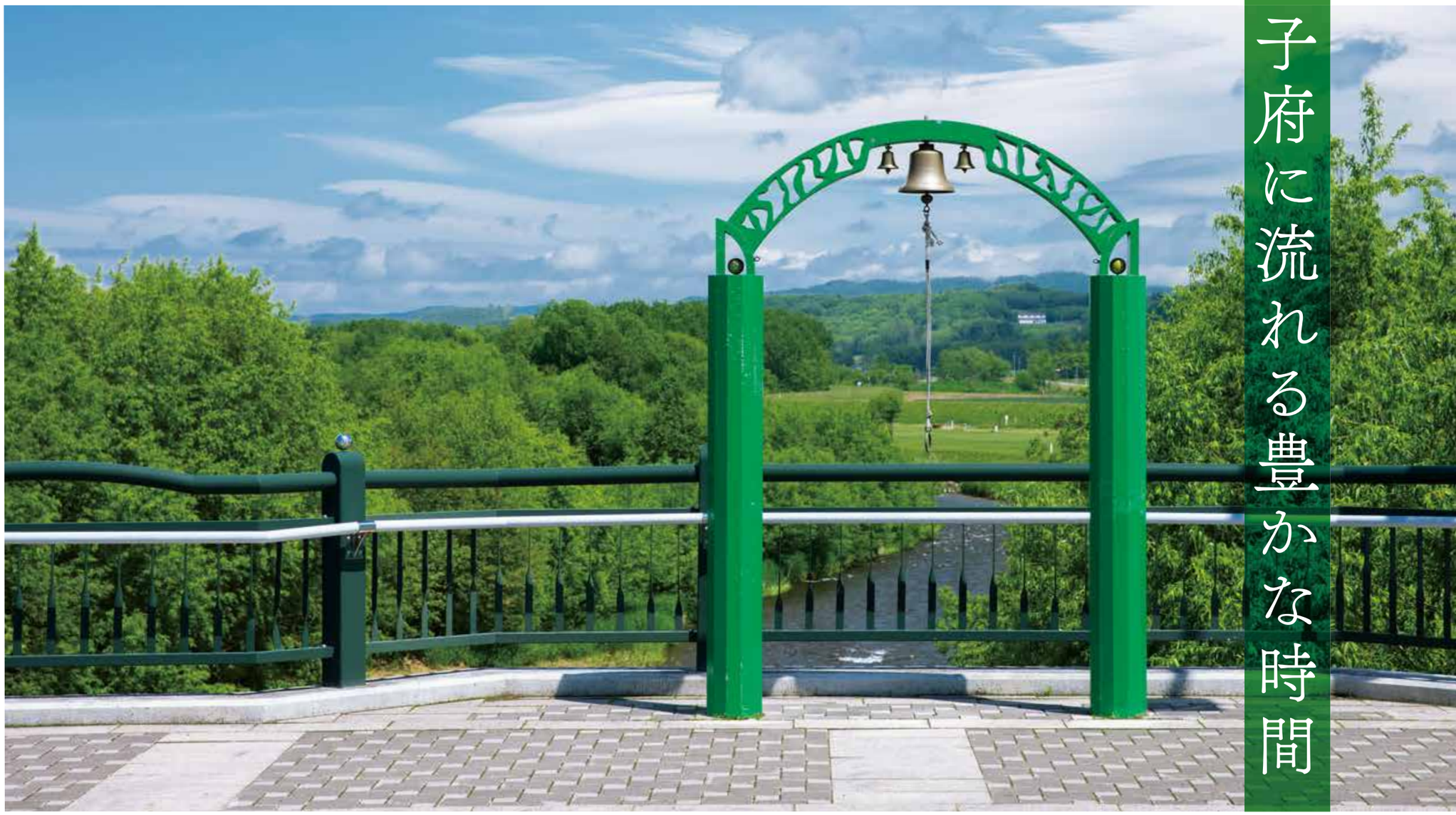
訓子府町では、豊かで住みよい町、誰もが住み続けられる町をめざし、人にやさしいまちづくりに取り組んでいます。

まちの中心部や商店街は、道路整備と商店街近代化を一体にして進め、電柱や電線は地中に埋設するなど、人と街並みが調和するよう景観を整備しました。

子育て支援や保健医療の充実、住環境の整備、バリアフリー化も進めており、子どもから高齢者まで安心して暮らせるまちをめざしています。

基幹産業である農業では、全国に先駆けてクリーン農業を推進しており、環境との調和と健康への配慮から減農薬や有機栽培にも取り組んでいます。

訓子府に流れる豊かな時間



訓子府町は、人にやさしい、安全・安心なまちづくりも積極的に進めています。人と街並みが調和した景観形成やバリアフリー化は、町民はもちろんのことほかの自治体からも高い評価を得ています。また、町の中心のポケットパークには「誕生」「生命」「再生」を象徴するオブジェ、町のシンボルである叶橋には4体のブロンズ像が設置されるなど、心を豊かにする芸術性も取り入れています。

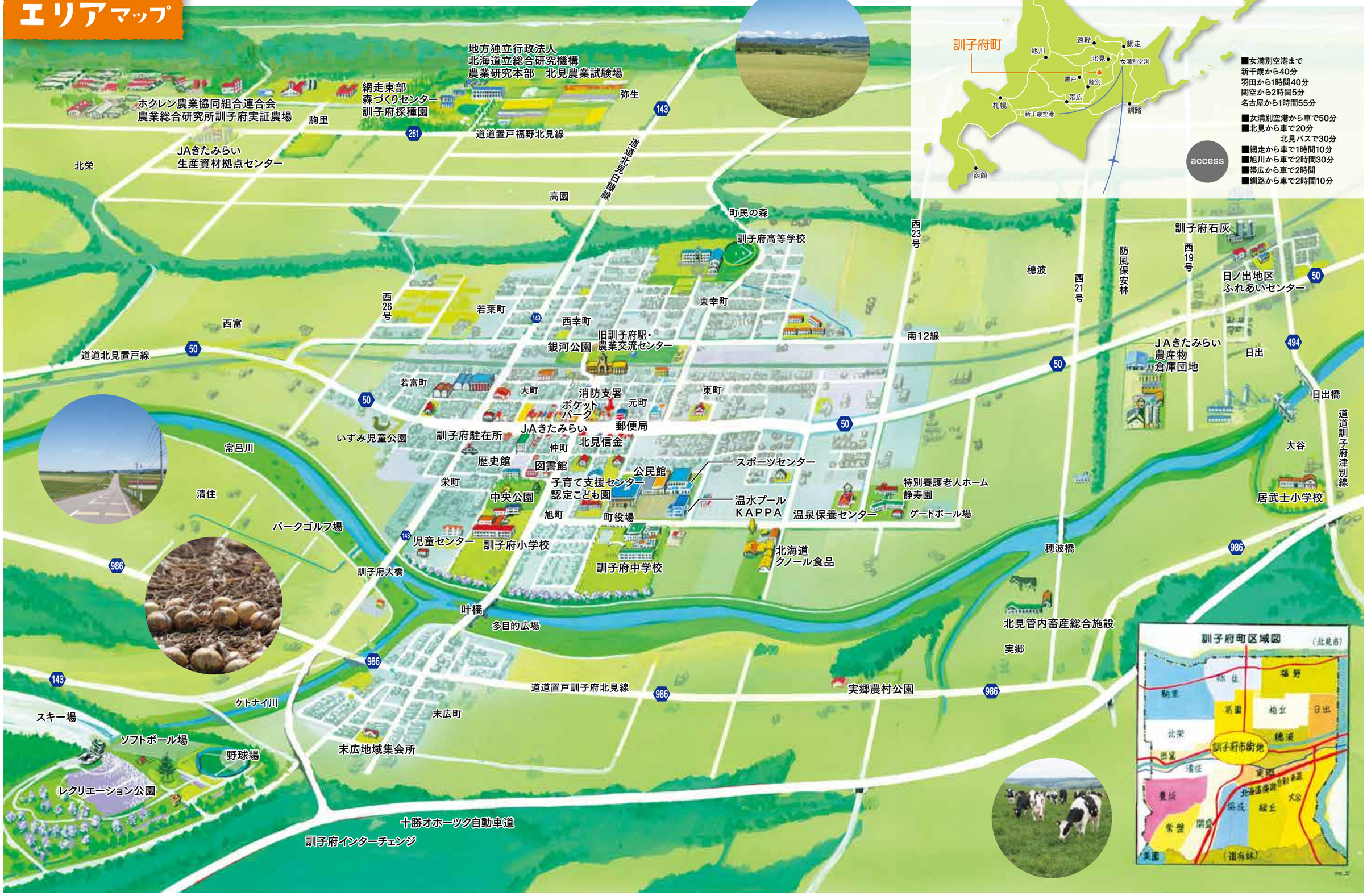
このほか、福祉・教育の充実にも努めており、子育て支援・高齢者福祉サービスなどの福祉環境の整備や、幼児教育・学校教育のほか、スポーツや文化・芸術活動などの社会教育においても特色ある教育を実践しています。とりわけ図書館は7年連続8度の図書貸出率全国一を記録したこともあり、「読書・社会教育の町」としても知られています。また、農業に関しては、農業基盤整備などによる土づくり、減農薬、有機栽培にも取り組んでおり、「エコあぐりタウン」をめざしています。エコファーマーの登録は100件を越え、環境に配慮した農産物にも注目が高まっています。

まちを100年以上も見守ってきた「叶橋」

訓子府町のほぼ中央を流れる常呂川に架かっている「叶橋」。市街地と末広町をつなぎ、町民の生活に欠かすことのできない橋です。これは明治42年にできた妻恋橋を架け替えたもので、昭和9年に鉄筋コンクリートの橋となり、平成8年に新たに架け替え工事をして現在に至ります。

「叶橋」の名前にちなんで、橋には夢や希望が叶うことを願って鐘を鳴らすことができる「夜明けの鐘」などのモニュメントが飾られ、未来の展望や希望を抱く4体のブロンズ像を設置しました。さらにメロンの形をした街灯、橋のたもとにはメロン型のトイレがあり、いまでは訓子府町のシンボルになりました。

訓子府エリアマップ


訓子府町
旭川
遠軽
網走
北見
女満別空港
置戸
陸別
帯広
札幌
新千歳空港
釧路
函館
access
■女満別空港まで
新千歳から40分
羽田から1時間40分
関空から2時間5分
名古屋から1時間55分
■女満別空港から車で50分
■北見から車で20分
北見バスで30分
■網走から車で1時間10分
■旭川から車で2時間30分
■帯広から車で2時間
■釧路から車で2時間10分
地方独立行政法人
北海道立総合研究機構
農業研究本部　北見農業試験場
網走東部
森づくりセンター
訓子府採種園
ホクレン農業協同組合連合会
農業総合研究所訓子府実証農場
駒里
JAきたみらい
生産資材拠点センター
北栄
弥生
道道置戸福野北見線
道道北見白滝線
高園
町民の森
訓子府高等学校
西23号
訓子府石灰
防風保安林
西19号
穂波
西21号
日ノ出地区
ふれあいセンター
西26号
若葉町
東幸町
西富
西幸町
旧訓子府駅・
銀河公園　農業交流センター
南12線
JAきたみらい
農産物
倉庫団地
日出
道道北見置戸線
若富町
大町
消防支署
ポケット
パーク
元町
東町
日出橋
郵便局
JAきたみらい
いずみ児童公園
訓子府駐在所
北見信金
仲町
常呂川
歴史館
図書館
公民館
スポーツセンター
大谷
道道訓子府津別線
栄町
子育て支援センター
認定こども園
特別養護老人ホーム
静寿園
清住
中央公園
温水プール
KAPPA
温泉保養センター
ゲートボール場
居武士小学校
旭町
町役場
パークゴルフ場
児童センター
訓子府小学校
北海道
クノール食品
穂波橋
訓子府中学校
訓子府大橋
叶橋
多目的広場
北見管内畜産総合施設
実郷
訓子府町区域図
（北見市）
福野
駒里
高園
柏丘
日出
北栄
穂波
訓子府市街地
西富
清住
実郷
豊坂
常盤
開盛
美園
大谷
（道有林）
道道置戸訓子府北見線
実郷農村公園
ケトナイ川
末広町
スキー場
ソフトボール場
野球場
末広地域集会所
レクリエーション公園
十勝オホーツク自動車道
訓子府インターチェンジ

「美味しい」を育てる、くんねっぷの情熱

メイド・イン くんねっぷ

Made in Kunneppu

全国有数のタマネギ生産地

訓子府町は、寒暖の差が大きい盆地特有の内陸性気候で、年間降水量は少なく、日照率が高いことから農業が盛んに行われています。

1919（大正8）年から栽培が始まったタマネギは、いまや全国有数の生産地となり、さまざまな種類のタマネギを栽培しています。早くから環境保全型農業にも取り組み、1987（昭和62）年より玉葱振興会では「安全、安心なの消費者ニーズへの対応と農薬の低散布化に向けて低農薬栽培の生産」を開始しました。

1996（平成8）年には「訓子府町クリーン農業推進協議会」が設立され、エコファーマー認定を取得する生産者も増えています。安全で安心、そして美味しいものづくりに努めています。

Made in Kunneppu

「スノーマーチ」

病害虫にも負けないジャガイモの新品種

北海道は全国一のジャガイモ（馬鈴しょ）産地で、訓子府を含む北見地区は北海道屈指の生産量を誇ります。とりわけ「男爵」は北海道を代表する品種ですが、病害虫に弱いという難点があります。ジャガイモシストセンチュウという病害虫が発生すると、被害は周辺の畑にも拡大するので、かねてより危惧されていました。

そこで北見農業試験場が育種してできたのが、新品種「スノーマーチ」です。土壌病害に抵抗力をもった品種なので、男爵産地にとっても、生産者にとっても頼もしい品種といえます。現在は北見地区を中心に流通していますが、年々生産量も増えていることから全国的に流通する日も遠くはないでしょう。

スノーマーチの普及を通して訓子府の魅力も発信したい

訓子府町馬鈴薯耕作組合　組合長
西森 孝広さん

スノーマーチは病害虫に強く、作付けや収穫がしやすいこともあって、農家にとっては救世主ともいえる品種です。特長としては、芽が浅いので皮をむきやすく、切っても変色しにくく、火の通りがいいのに煮崩れしにくいなど、調理がしやすく、とても美味しい。雪中貯蔵をすると甘みが強くなり、糖度は22度にもなります。2011（平成23）年から栽培が始まり、年々生産量も増えてきていますので、多くの人に味わってほしいですね。今はスノーマーチの栽培を拡大するとともに、物産展などイベントにも参加して認知度向上と消費拡大をめざしています。

甘く芳醇な香り、みずみずしい夏の味覚

Kunneppu Melon

北海道はメロンの出荷量が全国2位（※平成27年野菜生産量出荷統計調査）と上位にあり、産地としても知られています。北海道農業の縮図といわれる訓子府においても、メロンは1973（昭和48）年からハウス栽培が行われています。

訓子府メロンは、有機質肥料を使って土づくりに力を入れ、食味を追求して接ぎ木することなく栽培しています。日照時間が長く、盆地特有の昼夜の気温差がある恵まれた気候を生かして、甘くて良質なメロンが生産されています。

旬は7月中旬～8月中旬。品種は赤肉のルピアレッド、青肉のキングメルティを栽培しています。また、愛情と情熱をもって育てたメロンを生産者が自信と責任を持って出荷できるように、出荷時にはメロン一玉一玉に生産者名を記入したシールを貼っています。

今では訓子府を代表する特産品になったメロン。町にはメロン型の街灯や公衆トイレがあり、開基120年イメージキャラクターとしてメロンをモチーフとした「めろねっぷ」が選ばれるなど町民に親しまれています。

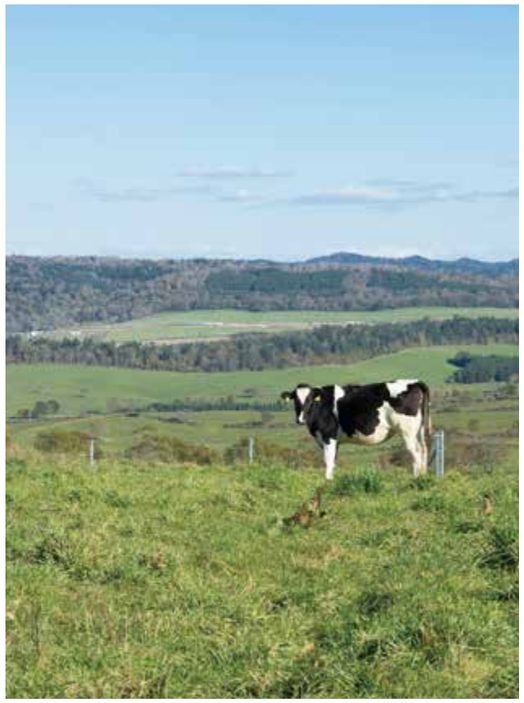
町を代表する特産品をつくることに誇りと喜び

JAきたみらい
訓子府町メロン振興会会長
山田 恵美子さん

生まれも育ちも訓子府。家業の農業を継ぎ、2000（平成12）年頃からメロン栽培をしています。食べる人も生産する人も安全であることが大切だと思っていますので、有機質肥料を使い、長ネギなどの混植で病害虫を防ぐようにしています。ハウス栽培は温度・湿度の調整が難しく、芽かきなど管理作業も大変ですが、手間をかけて育てたメロンを収穫するときは、喜びと安堵でいっぱいになります。そして「メロン美味しかったよ！」なんて言われたら最高にうれしいです。ただ、メロンを生産する後継者は不足していますので、10年後も20年後も訓子府メロンを食べていただけるよう努力していきます。

訓子府がはぐくんだ最上級メロン

「くんねっぷメロン」



戸当たり乳量は北海道トップクラス

Kunneppu
Dairy farming

訓子府での酪農は1907（明治40）年、わずか牛5頭から始まりました。1962（昭和37）年にはホクレンの増殖事業センターを誘致し、種牛牛舎、人工授精所など畜産総合施設を設け、当時は東洋一といわれた総合牧場ができました。また、昭和44年には乳用雌牛の預託育成を目的とした、訓子府町共同利用模範牧場を美園に開設し、戸当たり草地面積が少ない酪農家の飼養頭数拡大に寄与してきました。以降、訓子府の酪農はめざましく発展。優秀な乳牛を数多く飼育し、高品質の生乳を出荷してきました。

乳量などの日本記録を数多く出すなど、酪農王国・北海道の中でも訓子府は、上位の成績を収めていました。最盛期は118戸の酪農家がありましたが、現在は40戸ほどに減少しています。

近年は耕畜連携による地域内循環型農業を進めており、訓子府らしい酪農の在り方を展開しています。

また、未経験でも酪農に興味があり、酪農後継者を志す人を対象に、農協と受入農家が協議会を組織して、町の支援のもとで「酪農実習生受入制度」が始まりました。さらに、新規就農の支援も行っています。

耕畜連携して地域資源を循環 乳量・乳質の向上をめざす

訓子府町酪農振興会　会長
髙倉 昌勝さん

訓子府で酪農に従事して45年。最近は、搾乳や給餌、牛舎の掃除などのオートメーション化が進み、酪農の業務は随分変わりました。とはいえ、健康な牛を育て、乳質と乳量を向上させ、安全で安心な生乳をつくりたいという気持ちは変わりません。訓子府では耕畜連携が進んでおり、乳牛の敷料として使う麦わらと堆肥の交換をしています。また、良質な生乳生産を推進するため、さまざまな勉強会や検査・治療なども積極的に行っています。訓子府は酪農関連施設が整い、働きやすい環境ではありますが、後継者が不足していますので、酪農実習生や新規就農を志す人たちを応援していきたいですね。

安全で高品質の生乳を生産している

「くんねっぷの酪農」

Made in Kunneppu

訓子府の後継者たち

訓子府が開拓されて以来培われている開拓者精神や郷土愛は、ここで生まれ育ち、これからを担う若者たちにもしっかり受け継がれています。次世代を担うJAきたみらい青年部訓子府支部の3名、訓子府町商工会青年部の3名に、現状の課題、そして今後の展望などを語ってもらいました。

訓子府を支える若者の取り組み

仁木／訓子府町商工会では4年ほど前から、ご当地グルメとして「たれカツ丼」のPRに力を入れています。オリジナルキャラクター「たれカツ乙女 くるねちゃん」をつくり、イベントなどにも参加しています。

佐野／「たれカツ丼」は、それぞれのお店でオリジナルのタレを使っているので、味も個性があって美味しいです。

柴田／訓子府町民のソウルフードといえる「たれカツ丼」を多くの人に知ってもらうことは、訓子府のPRにもなると考えています。

藤森／私たちは農家なので、安全で、おいしく、良いものをつくることに日々懸命。JAきたみらい青年部としての活動には参加していますが、それ以外の活動はなかなか手が回りません。

上原／農業は栽培品目ごとに振興会などに所属し、勉強会などの集会も増えています。

風早／日々の作業量も多いので毎日時間が足りないですが、毎日しっかり働くことが、訓子府の未来につながると思っています。

風早 央知（かざはや ひさつぐ）さん
JAきたみらい青年部
訓子府支部副支部長

老舗農家の5代目。エコファーマーに登録。ジャガイモ、秋小麦、ビート、小豆、スイートコーンなどを栽培。農業後継者の減少を危惧しているそうです。

上原 寛隆（うえはら ひろたか）さん
JAきたみらい青年部
訓子府支部副支部長

訓子府に入植した農家の4代目。小麦、ビート、種子馬鈴しょ、スイートコーン、メロンなどを栽培。「やりたいことをやれる農家」をめざしています。

藤森 秀志（ふじもり ひでし）さん
JAきたみらい青年部
訓子府支部支部長

大学卒業後、家業の農業を継ぐ。今年で農家歴12年目。「常によいものづくり」を第一に考え、タマネギ、ジャガイモ、小麦、ビートを中心に生産しています。

仁木 義人（にき よしひと）さん
訓子府町商工会
青年部部長

地域密着型の薬屋「マルニ薬局」にて医薬品販売に従事。2006年、第一子の誕生を機に訓子府へUターン。町民の健康をサポートすることに努めています。

佐野 裕章（さの ひろあき）さん
訓子府町商工会
青年部副部長

佐野看板塗装店の3代目。家業を継ぐためエンジニアから転職して9年目。見た目の美しさだけではなく、機能性や安全性を考慮して塗装を手掛けています。

柴田 将兵（しばた しょうへい）さん
訓子府町商工会
青年部副部長

柴田石材工業の3代目。建墓はもちろんメンテナンスや解体・撤去まで担い、記念碑や石碑、石材小物も扱う。モットーは「丁寧で素早い仕事」とか。

訓子府の後継者たち

Discussion

訓子府の次世代を担う若者たちが我がまちの現状と未来それぞれの目標を語ってくれました。

暮らしやすいまち訓子府

仁木／進学と就職のため訓子府を離れていましたが、離れていたからこそ訓子府の住みやすさがわかりました。

風早／幼い頃から家業である農業を継ぐことを考えていたので、むしろ大学時代に訓子府から離れて視野を広げられたのは良かったと思います。

柴田／都会の便利さも知っていますが、隣町の北見に行けば大抵の用事は済ませられるので、訓子府にいて不便は感じません。むしろ、訓子府の穏やかで心地よい空気感が気に入っています。

仁木／訓子府は町の教育・福祉制度が充実していると思います。こども園もできたので、安心して子どもを預けられ、子育てしやすい環境が整っていると思います。

上原／子育てをする環境はいいのに、ほかの市町村と同じく訓子府も少子化は進んでいます。町の活性化には家族を増やし、子どもの数も増えることが大切ですよね。

藤森／若者同士の交流や婚活イベントのようなものは、商工会で取り組まれていますか？

佐野／平成26年から飲食店の活性化、町民の交流・出会いの機会創出をめざして「はしご酒」イベントの企画・運営をしています。

上原／訓子府はシャイな人が多いから、そういうイベントがないと出会う機会もないので大事ですね。ぜひ商工会には、ユニークな発想と企画でおもしろいことをしてほしいです。

仁木／少子化問題は後継者問題でもありますから、婚活を含めた人口減少などの問題は、商工とか農業とか関係なく、訓子府町民として取り組んでいく必要がありますね。

地域の魅力を生かしたまちづくり

藤森／訓子府町の開基120年ということでイベントが目白押し。農業と商工が一丸となって「ふるさとまつり」などを運営でき、良い刺激になりました。

仁木／実は訓子府を盛り上げていくために職業の枠を越えて『くんねっぷI倶楽部』を平成26年に立ち上げました。

柴田／『くんねっぷI倶楽部』の『I』は、私を意味する『I』で、訓子府を愛しているの『I』でもあります。フリーマーケット開催や近隣のまちのイベントに参加。イベントに参加するたびに、もっと訓子府の魅力が伝わるものを生み出したいと思うんです。

佐野／せっかく「たれカツ丼」のキャラクター「くるねちゃん」をつくったのでグッズ展開してみたいですね。ゆるキャラといわれるものが多い中、淑(しと)やかな萌えキャラの「くるねちゃん」は個性があって良いと思います。

柴田／以前参加したイベントで、訓子府のイチゴをソースにして、かき氷を提供。好評で手応えもありました。次回は訓子府メロンでソースをつくりたい。この試みは新たなご当地商品につなげられないかと考えています。

仁木／できれば生産者と一緒に、訓子府の新しいご当地グルメをつくりたい。訓子府の農産物は品質が良いので、そのままで十分とされています。その評価はありがたいものだけど、加工してさらに付加価値を高めたいです。

風早／良い考えですね。今は、良いものをつくることで精一杯なので、これから考えていきたいです。

上原／訓子府の魅力は「自然」。この自然を守りたい。たとえば、常呂川河川敷の清掃活動を通して、新しい取り組みはできないだろうかと考えています。

訓子府の豊かな未来をめざして

仁木／高齢者が増えるので、いわゆる買い物弱者を救う独自システムをつくりたいと思っています。

佐野／大手のインターネットサービスもありますよね。

仁木／できれば訓子府の商店街の商品を町民に届ける、ぬくもりのあるサービスをつくりたいです。訓子府だけの、訓子府ならではの仕組みを考えたい。

上原／ところで、共働きの家庭は多いと思いますが、訓子府で農業をするという職業の選択肢はないのでしょうか。

柴田／やってみたい人はいるはず。

上原／耕作放棄地が増えるより、有効に活用した方が良いと思っています。そのために解決すべき課題はありますが、農業に関わる人が増えるのは訓子府の発展にもなるはず。

柴田／農作業の手伝いとは違うからハードルは高いけれど、やりがいもありそう。

風早／まずは小規模な農業になるので、自家用やまちの人に提供するために、野菜をつくることがいいかもしれません。

藤森／農家を引退した人に指導してもらえると、栽培品目も増えるし、技術や知識の継承にもなりますね。

柴田／新しい加工品ができるチャンスにもなるかも。お互いに話してみないと分からないこともありますね。

仁木／今回の座談会で、組織間の交流の大切さを再確認しました。

藤森／10年後の若い人のため、訓子府のため、われわれが頑張りましょう。

地域の魅力が詰まった訓子府ブランド

Special Products HOKKAIDO KUNNEPPU BRAND

オホーツク管内で面積が一番小さい訓子府町。しかし、農業粗生産高は132億円以上（平成27年農協農業粗生産高）もあり、7つの生産者組織からなる訓子府町クリーン農業推進協議会では、安心な農作物の生産をめざしています。

訓子府町を代表する特産品も各種あり、とりわけ訓子府町を含む北見地方のタマネギは全国一の生産量を誇ります。このほかメロン、ジャガイモ、小麦、ビート、トウモロコシなど高品質でおいしい作物が多数収穫されています。さらに、それらを用いた特産品やご当地グルメも各種あります。

また、6月から11月までの毎週日曜日には、訓子府町農業交流センター（旧訓子府駅舎）で行われている生産農家直営の農産物直売所「ファーマーズマーケット夢ミール」で、朝採りたての新鮮で安心安全、そして美味しい農産物を取り揃えて販売しています。

最近では若い酪農家による牛乳やアイスクリーム販売など、新たな取り組みも始まっています。また、訓子府町では生産者と商工会が連携して町の特産品の普及やPR活動推進のため、さまざまな取り組みが進められています。

くんねっぷ メロン&農産物

■メロン

日照時間に恵まれ、昼夜の気温差が大きいことから、訓子府ではまろやかな口当たりで甘味の強いメロンを栽培。生産者名を記入したシールを貼り、出荷ダンボールには品質保証書を付けるなど、生産者の責任と誇りを感じさせる逸品です。

■タマネギ

訓子府町は全国有数のタマネギ産地で、さまざまな品種を栽培しています。極早生種「北早生3号」、早生種「オホーツク1号」、中晩生種「北もみじ2000」、赤タマネギも栽培。

■ジャガイモ

病害虫に強い新品種「スノーマーチ」は、収穫後貯蔵して甘みが増す12月～1月頃に出荷。卵型で皮がむきやすく、火の通りも早く、煮くずれも少ないので、煮込み料理に向いています。変色しにくいのでポテトサラダにも適しています。

■すずらんみそ

1921（大正10）年から続く太田醸造で、手づくりされている味噌。すずらんみそは、飽きのこないサラっとした自然の味と香りが特長で、みそ汁、みそ煮、みそ漬けなどに最適です。

■はちみつ

親子三代にわたって、はちみつを作り続ける菅野養蜂場。いまでは純国産天然はちみつとして訓子府町の特産品であり、オホーツクブランドにも認証されました。さらに、はちみつのお酒「菩提樹のミード」が2014年に誕生して注目を浴びています。

■うどん

訓子府町で多く収穫されている小麦「きたほなみ」を使用したうどんを製造している日の出めん。しっかりとしたコシと歯ごたえが感じられる、モチモチの「半生うどん」とツルツルの「生うどん」があります。

■お菓子

菓子司みやけでは、ミルクの風味豊かな「牛乳羊羹」やパイまんじゅう「銀河鉄道の旅」など。羽前屋菓子舗では、訓子府町の町花をイメージした「エゾムラサキツツジ」や「銀河浪漫」など地元銘菓も各種あります。

■むらさきしきぶ

訓子府町産の無農薬有機栽培ちりめん赤シソを使い、きらきら本舗で作られたジュース。水や添加物を一切使用せず、グラニュー糖や二種類の酢で作られたこだわりの一品です。5～6倍に希釈するとさわやかなドリンクとして、また、そのまま調味料としてマリネなどにも使えます。

訓子府を代表するご当地グルメ

くんねっぷたれカツ丼
イメージキャラクター
たれカツ乙女　くるねちゃん

■訓子府たれカツ丼

カツ丼といえばトンカツを卵でとじるものが定番ですが、訓子府では卵でとじずに、特製のしょう油ベースのタレをかけた「たれカツ丼」が定番です。現在、町内にあるほとんどの食事処で味わうことができ、訓子府のご当地グルメとして人気のメニューになっています。

■本格焼酎 訓粋

訓子府育ちのジャガイモ「スノーマーチ」を使った焼酎。ほのかに芋の香りがあり、くせがなく飲みやすいのが特長です。

認定こども園開園式

4月2日、認定こども園「わくわく園」の開園式が行われ、園児や保護者ら約260人とともに盛大に開園を祝いました。園児による遊戯や本町出身の松岡義和氏が作詞、小野朋之氏（訓子府中学校長）が作曲した園歌「風の子　雪の子　大地の子」の披露が行われました。また園児から工事関係者へ感謝状を送るなど、華やかで心温まる開園式となりました。フィナーレは、園児と母親らが中庭「はだしの庭」に集い、夢や願いを託した色とりどりのバルーンを大空へ飛ばしました。

開基120年記念式典

11月1日の記念式典・祝賀会は、町公民館で約200人が出席して行われました。「先人とともに築いた120年」のスライドショーで式典の幕が開け、訓子府高校の生徒による町民憲章の朗唱、そして菊池一春町長は「先人の労苦に感謝して困難から立ち上がる勇気を持ち、町を発展させることを誓います。」と式辞を述べました。町の発展に尽くされた方々の表彰も行われ、祝賀会では町民合唱団KNPが「わが地・わが町　訓子府」などの歌を披露し、盛大な祝宴となりました。

北海道日本ハムファイターズ関連事業

「北海道179市町村応援大使」プロジェクトで、4月23日には訓子府ＫＬ球友と訓中野球部が参加して、日本ハムファイターズのOB立石尚行さんと池田剛基さんによる少年野球教室が開催されました。7月24日には町民80名が札幌ドームで試合観戦し、11月21日は矢野謙次選手と谷口雄也選手による「トークショー」が行われました。2選手が来場者からの質疑応答に答え、サイン入りのレプリカユニホームやボールが当たる抽選会、記念撮影、訓中野球部を対象にした野球指導などが行われました。

くんねっぷふるさとまつり

今回で37回目となる訓子府の夏の風物詩。7月9日の前夜祭は、町内の太鼓チームによる迫力ある演奏で幕が開け、キッズダンスや訓子府音頭などで会場を盛り上げ、行灯パレードや花火大会で夏の夜を彩りました。7月10日の本祭では、「歌と笑いのステージ」や青年4団体によるイベントなどが催され、大変にぎわいました。

また、今回は開基120年記念であることから姉妹まちの津野町から「津野山古式神楽保存会」の方々による津野山古式神楽の披露も行われました。

訓子府町開基120年記念事業

未来（あした）へつなぐ笑顔のまち

訓子府町開基120年を迎えた2016（平成28）年。「みんなでつくった120年 僕らがつなぐ くんねっぷ」を合言葉に、訓子府の美しい景色や人々の笑顔がたくさん寄せられた「フォトコンテスト」、24年ぶりに復活した「町民運動会」、町民が姉妹まち高知県津野町などに訪問する「開拓の歴史を訪ねる旅」など、さまざまな記念行事を開催。町民とともに節目を祝い、さらなる繁栄を誓いました。

開基120年記念町民運動会

6月19日、訓子府小学校グラウンドで「町民運動会」が24年ぶりに復活開催されました。

町民約1000名が参加して、地区ごとにチーム編成され、さらに東西に分かれて、大綱引き、チーム対抗大リレーなど12種目を競いました。工夫を凝らした「減点玉入れ」や「〇×クイズ」では笑いが巻き起こり大変盛り上がりました。東軍が勝利を収めましたが、互いに賛辞と拍手を送り合いました。

訓子府のまちづくり
福　祉

誰もが安心して暮らせるまちへ

一人一人の健康管理意識を向上させ、住み慣れた場所で安心して過ごせるよう健やかで生き生きと暮らせるまちづくりをめざしています。

高齢化が進む現代社会において、訓子府町も同様に65歳以上の方の割合が年々高くなり、福祉サービスのより一層の充実が求められています。

「お年寄りが安心して暮らせるまち」をめざして、町はもちろん社会福祉協議会や福祉団体などもさまざまな事業に取り組んでいます。高齢者の「住み慣れた場所で暮らしたい」という希望に応えるため、1962（昭和37）年に在宅高齢者の生活を支援するホームヘルパーサービスが開始され、1990（平成2）年には特別養護老人ホーム「くんねっぷ静寿園」がオープンしました。

このほか、配食、除雪、移送、訪問など細やかな在宅福祉サービスを提供しています。さらに、シニア健康教室「しゃきっと倶楽部」、高齢者を支える地域づくりを目的とした「ささえあいプロジェクト」や「認知症サポーター養成講座」、介護家族を支えあう会「かなえーる」を実施するなど、さらなるサービスの充実をめざしています。

同時に「誰もが安心して暮らせるまち」をめざして、障がいのある方も暮らしやすいよう公共施設など地域のバリアフリー化を推進し、福祉サービスや就労支援などの充実も図っています。

子育て支援としては、安心して子どもを産み育てることができ、健やかに成長できる環境を整え、保育サービスや健診、子育てをする親同士の仲間づくり、父親の積極的な子育て参加促進などを行っています。

2017（平成29）年度から始まる第6次訓子府町総合計画においても、基本目標の一つに「いつまでも『健康』に暮らせるまちづくり」を掲げており、子どもから高齢者、障がいの有無に関わらず町民が健やかに暮らせるよう地域福祉の充実をめざします。

まちの活動

母親教室

これから赤ちゃんを迎える妊婦が、安心して出産に臨んだり育児ができるように母親教室を行っています。また、同時期に出産される人同士が集まることから仲間づくりの場としても機能しています。

筋活クラブ

より細やかな支援を提供する個別介護予防事業のひとつ。高齢者本人が望む生活を叶えるため、理学療法をベースとした支援を行ない、生活の質の向上をめざします。

相談支援やイベントを通して楽しい子育てを応援しています

訓子府町で子育て支援センター「ひだまり」が開設されて7年目になりました。当センターでは、陽だまりのように暖かく、安心して思いっきり遊べる環境づくりを心がけており、子どもたちが遊びの中で体と心の発達を促し、友情や信頼関係をはぐくみ、健やかに成長するよう見守っています。母親には子育て相談ができる仲間づくり、父親の育児参加支援のほか、子育てサポートのサークル「メロンキッズ」の協力のもと一時預かりも行うなど、訓子府町で楽しく子育てができるよう支援しています。

子育て支援センター「ひだまり」
センター長 森 奈美恵さん

総合福祉センター「うらら」

障がいのある人や高齢者の社会参加活動を支援している福祉施設です。町役場庁舎の正面ロビーにはNPO法人福祉サポートきらきら本舗「喫茶たんぽぽ」が開設され、障がいのある人の自立支援と町民相互の交流を推進しています。

児童センター「ゆめゆめ館」

2013（平成25）年に開館した児童センターです。共働き家庭など、放課後に留守家庭となる児童を預かります。そのほかの児童も自由に来館して遊ぶことができます。

くんねっぷ静寿園

1990（平成2）年に開設した特別養護老人ホームです。介護が必要な高齢者のお世話のほか、在宅高齢者の生活を支援するデイサービス、短期入所などのサービスを提供。ケアハウスほなみも隣接しています。

子育て支援センター「ひだまり」

2010（平成22）年に開設し、0歳から就学前の子どもが親子で遊んだり、子育ての応援やお手伝いをしています。子育てが楽しくなるミニ講座、子育て相談サロン、一時預かりなど、さまざまな取り組みをしています。

訓子府のまちづくり
教育

地域に開かれた教育環境

次世代を担う子どもたちはもちろん、大人も高齢者も生涯にわたって学習できるよう充実した教育設備と環境を整えています。

２０１５（平成27）年４月１日施行の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律に基づき、訓子府町教育委員会は総合教育会議を設置し、「教育大綱」を策定しました。

基本理念は「子どもたちの笑顔が輝く教育のまちづくり」とし、子どもたち一人一人の人権を尊重し、幸せで健やかな成長と子育てを支え、安心して子どもを産み育てることができる環境づくりを進めています。

学校教育における基本目標は、「自ら学び、考え、行動する力を育てる」。次世代を担う子どもたちが、確かな学力を身につけ、心豊かに支え合い、学校・家庭・地域の連携や学校間の連携・交流を図りながら「生きる力」をはぐくみます。２０１６（平成28）年４月には、幼保連携型施設である認定こども園「わくわく園」が開園し、生まれてから中学校まで一貫した子育て支援や保育、教育を受けられる環境が整いました。切れ目のない学びの連続性、支援の継続性を構築しています。

子育て支援・幼児教育は「安心して子どもを産み、育てることのできる環境を創る」こと、社会教育においては「人をはぐくみ、人がつながり、地域を創る」ことを基本目標としています。

町民が心の豊かさを実感でき、学び続けることのできる学習環境を推進しており、小学生を対象とした「通学合宿」や町民共通の課題解決の方策を学習する「くんねっぷの未来づくり大会」など各種講座を開催しています。

また、読書と情報の拠点であり、町民が集う場でもある図書館においても、図書資料を充実させながら、本の宅配サービスや移動図書、絵本ライブなどを通して図書館活動を展開。このほかスポーツ、芸術文化振興など多岐にわたって取り組んでいます。

まちの活動

若がえり学級

60歳以上が参加する高齢者教室です。高齢者に適した運動と学習を毎月2回開催。仲間づくりを通して、社会参加を促進させ、高齢者の体と心の健康維持を目的に、さまざまな取り組みをしています。

スクールバンド

訓子府小学校スクールバンドが、2016（平成28）年に開催された第37回全日本リコーダーコンテストで『金賞』を受賞しました。さらに、北海道代表として6年連続出場という快挙を成し遂げました。

子育て支援の核となる施設をめざし 質の高い幼児教育と豊かな保育を提供

認定こども園「わくわく園」は訓子府幼稚園とくんねっぷ保育園を統合し、「未来にきらめく子どもたちに生きる力を」をコンセプトに、保育と教育を行う幼保連携型施設です。

園舎は町有林のカラマツを構造体に、姉妹町の津野町産ヒノキを床材に使用した落ち着きのある空間で、子どもたちがはだしで駆け回るのに最適。また、地元の食材を使用し調理の様子が見える給食室を備え、完全給食を実現したことから食育活動にも努めています。子どもたちの健やかな成長・発達を促し、保護者が安心して預けることができる子育て支援の核となる施設をめざしていきます。

認定こども園「わくわく園」
園長 吉田 寛さん

小・中学校・高等学校

町内には小学校2校、中学校1校、高校1校があり、それぞれ特色のある教育を行っています。

居武士小学校

訓子府小学校

訓子府高等学校

訓子府中学校

スポーツセンター

アリーナはバスケットボール公式試合2面、バレーボール公式試合2面、バドミントン6面、卓球10面を確保でき、小体育室、トレーニングルームなどあります。各団体の大会や、スポーツ教室もあります。

公民館

500人収容できる講堂をはじめ、和室研修室、実習室、視聴覚室、会議室、調理実習室を備えています。町の文化、コミュニティーの中心として各種研修、会合、コンサートなどさまざまな行事に活用されています。

図書館

1984（昭和59）年に開館し、8度も図書貸出率日本一になりました。現在も多くの町民に利用されており、町内在住の障がい者や高齢者で来館することが困難な方を対象に「図書宅配サービス」も行っています。

訓子府町幼保連携型認定こども園

「わくわく園」

2016（平成28）年に開園し、木の温もりにあふれ、自然エネルギーを活用した施設となっています。町内の入園希望者はもちろん、町内事業所に勤める町外の方や里帰り出産で帰省した方の子どもも受け入れるなど全国から注目されています。

訓子府のまちづくり
生活環境

地域資源を活用 便利で快適な暮らし

豊かな自然に恵まれ、人々の温かい交流があり、誰もが住み続けられる住環境があります。訓子府町では、地域と企業、行政が一体となった、まちづくりをめざす取り組みを続けています。

訓子府町において生活環境整備は、1989（平成元）年、市街地区の下水道工事を皮切りに、道路の改良舗装、河川や公共施設の整備など快適な生活環境づくりのため各種事業に取り組みました。

それと同時に公園や街路灯の整備も進められ、1997（平成9）～2002（平成14）年度の街並み整備事業では、商店街の近代化や電線類地中化など景観も整備。また、町の中心には「誕生」「生命」「再生」を象徴するオブジェのあるポケットパークがあり、その地下には防災用貯水槽も設置されています。

また、訓子府町内に本社を構える企業や研究機関もまちを支え、発展に大きく貢献しています。

1991（平成3）年には温泉保養センター、1995（平成7）年に温水プール「KAPPA」、その翌年にはレクリエーション公園が完成し、訓子府町で快適に過ごせる豊かな環境が整備されています。

温水プール「KAPPA」

日本水泳連盟公認の25メートルのプール、水深の浅い子ども用プールのほか、流水プールやウオータースライダーもあります。水着の中に専用のオムツパンツを着用すれば乳幼児も利用可能。高齢者や障がい者も利用しやすいように館内はバリアフリーで、随所にスロープを設置しています。

温泉保養センター

「美人の湯」と呼ばれ、無色透明で純度100％の天然温泉。大きめの高温浴槽と小さめの低温浴槽、サウナ室と水風呂、入浴後にくつろげる野外デッキや休憩室（和室）もあります。アメニティ類も充実しており、レンタルタオルもあるので、手ぶらで気軽に立ち寄ることもできます。

レクリエーション公園

訓子府町市街地南部にある公園。木製遊具、バッテリーカー、野球場、バーベキューハウス、スキー場、水遊び場があるので1年中を通して楽しめます。特に約400本のエゾヤマザクラ、約6000本のエゾムラサキツツジ、丘一面に広がるシバザクラが満開になる春は多くの人でにぎわいます。

まちの活動

高齢者交通利用サービス

路線バスは一定運賃、タクシーは初乗り料金で利用できる支援サービスです。これは満75歳以上の訓子府町民を対象にしており、利用には事前登録が必要になります。

地域再生プロジェクト

北海道の「地域づくり総合交付金（地域再生加速事業）」の支援を受けて、訓子府町の地域再生プロジェクト「人づくり、モノづくり、元気なまちづくりプロジェクト」です。

十勝オホーツク自動車道（高規格道路）

2015年11月8日、十勝オホーツク自動車道訓子府インターチェンジが開通しました。
開通区間は訓子府インターチェンジから北見西インターチェンジまでの12キロメートルで、これにより北見市内の病院や商業施設へのアクセスが向上しました。

屋内ゲートボール場

冬暖かく、夏涼しく、年間を通じて利用でき、高齢者スポーツの中核施設となっています。常呂川河川敷広場には屋外ゲートボール場もあります。

野球場・ソフトボール場

小中学校や社会人の野球大会などで使用。正規コート2面あるソフトボール場も併設しています。

スキー場・スケートリンク

レクリエーション公園内にあり、ゲレンデ面積26,000平方メートルのスキー場。冬期間は居武士小学校グラウンドにスケートリンクも開放しています。

まちを支える企業・研究機関

北海道クノール食品㈱

契約栽培したスイートコーンを、一番おいしい時期に収穫し、その日のうちに工場で加工して製品化。コンソメや鍋キューブなどの商品を製造しています。そのほか、工場を見学することができ、地域の小学生を対象とした学習活動も展開しています。

訓子府石灰工業㈱

1950（昭和25）年創業。訓子府町に本社、工場、鉱山があり、石灰石の採掘および消石灰や肥料用タンカルなどを製造している石灰総合メーカー。町内で採掘される石灰岩を原料とした土壌改良剤をはじめ、各種肥料の製造で地域農業振興に貢献しています。

北海道立総合研究機構 農業研究本部 北見農業試験場

1959（昭和34）年、北見市から移転。主に畑作や牧草に関する試験研究を行うとともに、オホーツク地域の農業に対応した試験研究を実施。パン用春まき小麦「はるきらり」や日本めん用秋まき小麦「きたほなみ」、ジャガイモの新品種「スノーマーチ」など高品質で病害虫に強い作物を開発しています。

ホクレン農業協同組合連合会 農業総合研究所 訓子府実証農場

酪農・畜産に関わる飼養管理技術や、ICTを活用した農作物栽培技術の実証試験を行い、得られた知見や技術の普及推進を行っています。また、農業後継者や酪農ヘルパーなどを対象とした各種研修を通じて、担い手と技術者の育成を図っています。

訓子府のまちづくり
防災・安全

守り、助け合う安全・安心のまち

自ら安全を守り、隣人と助け合い地域の安全は地域で守ることをめざし防災対策・交通防犯運動を進めています。

近年、全国各地で地震や集中豪雨などの自然災害が多発していることから、地域の防災・減災に高い関心が寄せられています。

かつては常呂川の氾濫に悩まされた時期もありましたが、堤防の整備などの治水事業の推進や、防災マップの作成により防災意識の向上を図っています。また、災害時の避難場所となる施設の見直しも定期的に行っています。

災害などが発生した場合、防災メール、エリアメールや広報車で避難を促す用意を整え、高齢者や障がい者など避難支援を要する方にも対応できるように備えています。

また、訓子府消防団の活動や防災訓練で防災意識を高め、地域の力を結集し、「自助・共助」の動きを拡大するなど、地域ぐるみで地震・風水害などの防災対策や防火対策、さらに防犯・交通安全の啓発も常に行っています。

姉妹町交流

高知県高岡郡

津野町 Tsuno

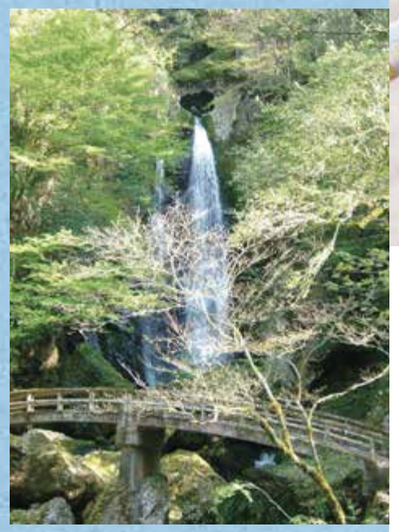
四万十川の源流点にあるまち

高知県中西部に位置する津野町。ここは訓子府町を開拓した北光社移民団のふるさとが、高知県という縁で交流が始まり、訓子府町の開拓記念日でもある2001（平成13）年5月8日、東津野村にて「姉妹まち」として締結し、今後の交流発展を誓い合いました。なお、東津野村は2005（平成17）年、葉山村と合併して「津野町」となりました。

津野町は、比較的穏やかな温暖多雨な地域で、森林面積が約90％も占める中山間地域です。町には日本最後の清流四万十川の源流点があり、日本三大カルストのひとつ四国カルスト、さらにニホンカワウソが最後に目撃された清らかな清流の新荘川があるなど自然豊かな町です。

また、「花取り踊り」や国の重要無形民俗文化財に指定されている「津野山古式神楽」といった伝統芸能が今も受け継がれています。このほか、かつての幕末明治維新の時代に坂本龍馬が駆け抜け、その後も土佐藩からの脱藩の志士たちが通っていたという脱藩の道（朽木峠越え・布施ヶ坂）には道しるべがあり、随所に歴史を感じさせてくれます。近年では、2006（平成18）年より、鶴松森以東に20基の風力発電施設が稼動を開始しており、まさに「清流と風と歴史に会えるまち」です。

訓子府町とは児童や農業者との交流が続けられており、その交流は両町のまちづくりに生かされています。



津野町 data

位置／高知県の中西部に位置
人口／6,123人
（平成28年4月1日現在）
面積／197.85㎢
気候／比較的穏やかな温暖で多雨
http://www.town.kochi-tsuno.lg.jp

イベント／津野町夏まつり
産業祭
棚田キャンドルまつり
特　産／茶
しょうが
みょうが

姉妹町までの歩み

平成5年	9月	高知県知事に開基百年事業として、交流と記念碑交換先を依頼
平成5年	10月	東津野村から交流の意思表示
平成6年	5月	東津野村の明神村長と森光議長が初来町
平成7年	6月	深見町長が東津野村を訪問
平成8年	7月	本町の小学生24人が東津野村で地元小学生と交流
		開基百年記念式典に明神村長と森光議長が来町、「開基百年記念碑」除幕式に出席
平成8年	11月	中央公園で津野山古式神楽が披露される
		東津野村での「開拓感謝の碑」除幕式に深見町長と西森議長出席
平成9年	7月	東津野村の小学生12人が来町、本町の農業施設を見学
平成10年	10月	東津野村の農業関係者9人が来町、本町の農業施設を見学
平成12年	6月	東津野村の明神村長ほか議員全員が、本町を表敬訪問
平成13年	3月	両町村議会で「姉妹まち」締結を議決
平成13年	5月	「姉妹まち」締結書に調印
平成17年	2月	東津野村が葉山村と合併し「津野町」となる

町民の意見を取り入れたすべての町民にやさしいまちづくりを推進

訓子府町では、広く町民の意見を聞く施策として「車座トーク」や「夜間町長室」など、さまざまな取り組みを行っています。また、２０１１（平成23）年度からは新しい町民参画の仕組みとして「まちづくり推進会議」が始まり、町民との意見交換を通して、より良いまちづくりを進めています。

また、行政運営の指針であると同時に、行政と町民が一体となってまちづくりを進めていくために10カ年の総合計画を策定しています。

２００７（平成19）年度から２０１６（平成28）年度までは、「豊かなみどりあふれる笑顔 みんなでつくるふれあいのまち」を将来像として第５次訓子府町総合計画を策定。安全で快適な生活環境の中で、ゆたかな自然の営みを大切にはぐくみ、すべての町民が生きがいとやすらぎを感じることのできる地域社会の実現に努めてきました。

２０１７（平成29）年度から新しく始まる第６次訓子府町総合計画では、『『ちょっといいね！』がたくさんあるまちくんねっぷ』を町の将来像とし、その実現に向けて子育て、産業、教育、福祉などの7つの基本目標を掲げています。その中で、前期5年は「強いまち」、「人を育てるまち」、「安心して住み続けられるまち」という3つの重点プロジェクトを推進し、基幹産業である農業の持続的発展をはじめとした産業の活性化、社会資本整備や地域防災力の強化、子育て支援、教育活動の活性化、住まいなど誰もが安心して暮らせる環境を確保するなど、まちの将来像の実現をめざしていきます。

これからも、まちの主役である町民と行政が手を取り合い、誰もが住みよいまちづくりを進めていきます。

訓子府町役場

まちづくり推進会議

これは町の政策決定に住民が直接参加できるように設置されたもので、各自治会から推薦された委員で構成されています。行政の公正および透明性を高めるため、会議は公開制となっており、議事録も後日公開しています。

次世代を担う若者たちへの道しるべに

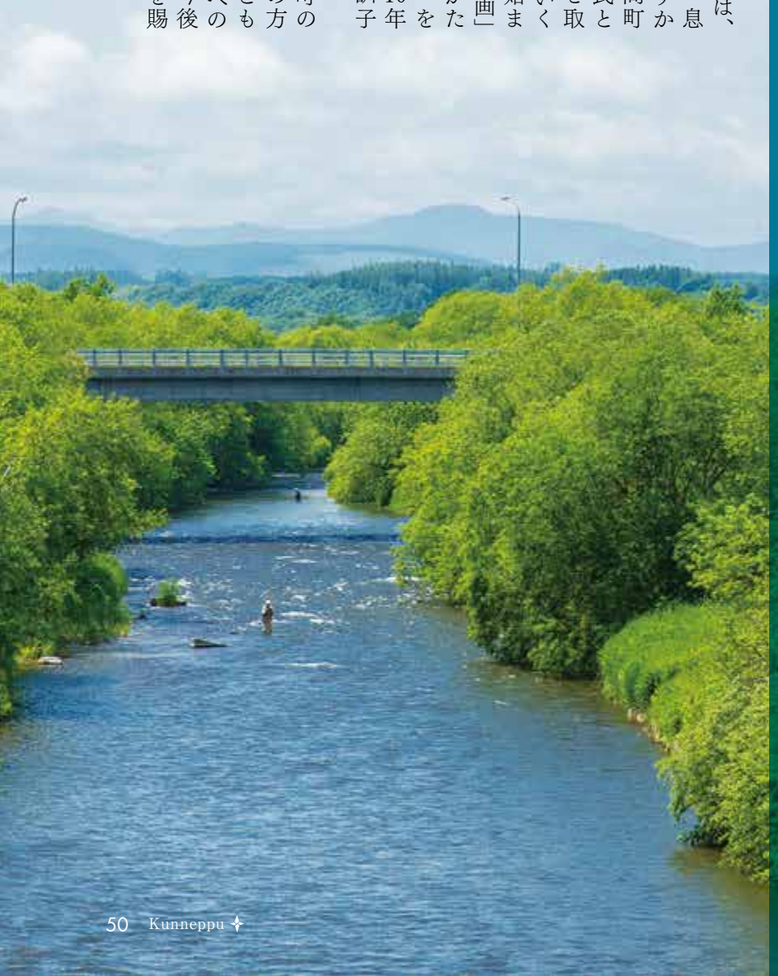
訓子府町長 菊池　一春

訓子府町は明治30年5月8日、高知県の北光社移民団の方々が開拓の鍬を打ち下ろしてから１２０年の歳月が経ちました。以来、この北の大地で農業を基幹産業として発展してきました。

訓子府町では「すべての町民にやさしい町づくり」を政策の柱に掲げ、豊かな産業政策に取り組んでおり、農業においては農業基盤整備をはじめ、関連企業・団体との連携を進めております。教育政策においても、「子どもの笑顔が輝く教育の町づくり」のため、中学生までの医療費助成の拡大や児童センター「ゆめゆめ館」、幼保連携型の認定こども園「わくわく園」の開設をいたしました。また、誰もが将来にわたって住み続けられるよう、高齢者や障がい者の多機能施設の充実をめざしております。

本町のような小規模自治体は、町民と行政双方の顔が見え、息遣いも聞こえるのが特長ですから、町長室を開放する「夜間町長室」など、これからも町民と真摯に向き合い、町民の声を取り入れたまちづくりを進めていくとともに、平成29年度から始まる「第６次訓子府町総合計画」では、『『ちょっといいね！』がたくさんあるまちくんねっぷ』をまちの将来像として、今後10年間の姿をしっかり見据え、訓子府の未来を築いてまいります。

この要覧により、訓子府町の暮らしやすさや魅力が多くの方に伝わることを期待するとともに、次世代を担う若者たちへの道しるべになれば幸いです。今後ともなお一層のご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。



概要

町民憲章（昭和45年8月1日制定）

町民憲章は、「自分たちの住む郷土には、だれでも愛着があり、住みよい郷土の限りない発展を願っている」との願いを表したものです。大正9年に置戸村から分村し、満50年を迎えた昭和45年に「訓子府町町民憲章起草審議会」を立ち上げ、案が作られ、町議会で制定の同意を受けました。

（町民憲章前文）
美しい緑の野山につつまれ、常呂川の清い流れにそって、発展してきた訓子府町には、いまも先人のたくましい開拓精神が生きています。
わたしたちは、いつまでも郷土を愛し、大きく伸びる訓子府の町民であることに誇りを持って、この憲章を定めます。

一．自然の恵みに感謝し、美しい町をつくります。
一．元気に働き、豊かな町をつくります。
一．きまりを守り、明るい町をつくります。
一．たがいに助け合い、楽しい町をつくります。
一．未来に希望をいだき、文化の町をつくります。

【位置と面積】

■総面積
190.95平方キロメートル

【町章】
外回りの「北」は北海道と北見地方を表し、中央の「訓」は町名頭文字。5個の円を組み合わせ、相互協力を表現しています。
（昭和26年11月1日制定）

【町花】
エゾムラサキツツジ

【町木】
オンコ